

クルド音楽を知る－「声」が響き渡る、円形劇場 (映画上映・コンサート・対談)

稲葉 奈々子

開催日：2022年5月22日

国を持たない民族としては世界最大といわれるクルド人たちの故郷は、多国間に分断されている。そのうちのひとつトルコでは、共和国建国以来クルド人の母語と文化が厳しく禁止され、クルド人の存在自体が否定され弾圧され続けてきた。そのような状況下において、母語であるクルド語とクルド文化を命がけで守り抜いてきたのがデングベジュという語り部たちである。

日本にも2000人におよぶクルド人が暮らしており、埼玉県の川口蕨地域にはトルコ南東部出身のクルド人たちのコミュニティがある。故郷に帰ることが容易ではない状況で家族と共に暮らし、多くのクルドの子どもたちが育っている。1990年代の初頭より来日した第1世代を親に持つ子どもたちは、日本の子どもたちと同様に学び、若者へと成長しているが、日本は子どもが故郷について知りえる環境を与えてはいない。在日クルド人たちのルーツが存在する故郷の地を知らない子どもたちは、自らのアイデンティティについて、日本人ではない、かといってクルド人なのか、それともトルコ人なのかと、考え込んでしまう事さえある。日本ではクルド語での表現が禁止されているわけではないが、クルド語を使用しない親たちの元で育つ子どもたちはすでに、クルド語を失っている。クルド語の継承は、日本でも難しくなっている。

故郷に帰ることが困難なクルドの大人たちと、故郷を知らないクルドの子どもたちに、地図には書かれていない故郷からの声と伝統を届け、同時に、ほとんど知られていないクルド人の文化を日本に住む人々に知ってもらうべく、「Voices from the “KURDs”」と題する本企画を構想し、クルド音楽コンサートと映画上映会を実施した。

映画は、中島夏樹監督によるクルドの語り部デングベジュをテーマにしたドキュメンタリー映画『地図になき、故郷からの声』（英題 *Voices from the homeland*）であり、2021年に東京ドキュメンタリー映画祭短編部門においてグランプリと大阪観客賞を受賞している。クルド音楽は日本在住のクルド人アーティストによるパフォーマンスである。映画と歌に続き、監督とアーティストのトーク、会場との質疑応答により、クルド文化を紹介した。

アーティストは、難民申請者として家族で日本に滞在している。アーティストの家族も参加しており、小さな子ども3人と妻は、前方の席で、「パパ応援団」さながらに声援をおくり、最後は舞台にあがって踊りも披露してくれた。クルドの子どもたちが、出身文化を誇りに思える感性を存分に伸ばしていけるような教育機関でありたいと思わされた。

本企画は、グローバル・コンサーン研究所、イスラーム地域研究所の共催、クルドを知る会の協力により実施した。参加者は約150名であった。

稲葉 奈々子 (いなば ななこ)

(グローバル・コンサーン研究所・上智大学総合グローバル学部)